

トルコ外交の基軸は変化したのか —2つの柱から3.5の柱へ—

2018年3月17日：日本安全保障貿易学会研究大会
ジェトロ・アジア経済研究所
今井宏平

本日の報告内容

- トルコ外交の指針確認

- 2017年のトルコ外交を総括
 - ① トルコとアメリカの関係
 - ② トルコとロシアの関係
 - ③ トルコと湾岸地域の関係
 - ④ トルコと北イラクおよび北シリアの対クルド対策

トルコ外交の指針

- トルコの外交は主に地政学とアイデンティティによって形成
- どの指針を基軸とするかは政権や時代によって変化

●地政学・・・4.5の側面

①西洋を重視した外交

②中東を重視した外交

③テュルク系民族を重視した外交

④ロシアを重視した外交

0.5は国内問題と外交問題が交差するクルド問題

●アイデンティティ

①現状維持：現存する国境を最重要視

②現状打破：新オスマン主義

西洋を重視した外交

- トルコ共和国の建国者、ムスタファ・ケマルの徹底した西洋化を志向
- ケマルの近代化／文明化 = 西洋化の志向は外交政策にも影響
- 基本的な外交理念はケマルが1931年に示した国内平和・世界平和
- この外交理念を達成するための原則が、西洋化と現状維持
 - 1920年のセーヴル条約で国家崩壊の危機に追い込まれた経験
 - 近代化／文明化を達成し、他の西洋諸国と対等な関係を築く

西洋を重視した外交

- 西洋化が具体化していったのは冷戦期以降
 - アメリカを中心とする西側陣営への参加
 - 北大西洋条約機構（NATO）への加盟
 - 1999年に欧州連合（EU）加盟申請国
2004年から交渉開始
- ただし、EU加盟交渉に関しては、近年停滞
 - ⇔同じく2004年から交渉開始のクロアチアは2013年に加盟
 - 重要なのは、加盟よりも加盟交渉

中東・イスラーム諸国を重視した外交

- 中東との関係が最初に活発になったのはデタント期
- 冷戦体制崩壊後、恒常的に中東との関係が開始
- 90年代は安全保障オンリー
- 2000年代は安全保障の問題だけでなく、経済協力も進む
- 特に2002年に公正発展党が単独与党になってから
中東・イスラーム重視が目立つ

公正発展党時代の指針は基本的に2本柱

- アフメット・ダーヴトオール（元外相・元首相）
「トルコは中東を含むアジアにどのように弓を引くかで、ヨーロッパやアメリカに対して放つ矢の距離が決定するのである。その逆も然りである」
- フィリップ・ロビンズ
「トルコ外交は、地政学のレベルではEUと中東という『2つの引力』によって規定される」



民族主義に基づく外交

- 冷戦体制が崩壊し、旧ソ連地域において中央アジア、南コーカサスの国々が独立したこと、バルカン半島で危機が発生したことが契機
- 当時の大統領トウルグット・オザル、オザルの後任となったスレイマン・デミレルはテュルク系民族の連帯性を強調
→ただし、トルコの「先輩外交」は思ったより進展せず
- それでも現在に至るまで、「トルコ語を話す諸国間会議」など継続される

ロシアを重視したユーラシア主義

- トルコには伝統的に左派系知識人を中心にロシア／ソ連を重視する「ユーラシア主義」が存在
- 左派知識人はムスタファ・ケマルの反帝国主義の姿勢を強調し、また、経済に関して5カ年計画など、社会主義の制度を活用している点に着目
- 外交においてはロシア／ソ連を最重要同盟国とする考え

2 本柱からの変化：トルコとアメリカの関係

- アメリカはトルコにとって、「最重要」もしくは「欠かせない」同盟国
 - 冷戦初期（1945年～1950s） / 新冷戦期（1980s） / ポスト冷戦期（特に中東の不安定期）
- 両国を結び付けるのは「共通の脅威認識」
 - ⇔ 「共通の脅威認識」が弱まると同盟も弛緩
- 2013年以降、関係が微妙になり始める
 - その要因となったのは3つの出来事

① 2013年夏のアサド政権の化学兵器使用疑惑

- トルコは2011年11月以降、アサド政権と対立
- アサド政権と対立する反体制派を後押し
- トルコは最大のシリア難民受け入れ国
- トルコとシリアは911キロメートルの陸続きの国境を共有
→地理的にシリアの脅威を受けやすい

② シリアにおけるアメリカのクルド勢力重視

- トルコは北シリアに位置するクルド系勢力、民主統一党（PYD）およびその軍事部門である人民防衛隊（YPG）を自国の非合法武装組織、**クルディスタン労働者党（PKK）と同一組織と認識**
⇔アメリカはPKKはテロ組織と認定しているが、PYDおよびYPGはPKKと関連しないと説明

アメリカとPYDの連帯

- 2017年4月25日、トルコ軍はイラク山岳部とシリアの北東部を越境攻撃
 - 4月25日の空爆後、米軍がシリア北部を巡回し、トルコの攻撃を制止
 - クルド兵士の葬儀にアメリカ兵が出席
 - 5月9日にトランプ大統領はPYDへの直接の武器提供を許可
 - ラッカ、デリゾールの対IS戦ではPYDの軍事部門YPGの兵士が主力
 - 18年1月13日にアメリカがシリア国境防衛軍設立。クルドも主力に

③ 2016年7月のトルコにおけるクーデタ未遂事件

- 2016年7月15日、軍の一部グループがトルコで36年ぶりとなる武力によるクーデタを決行
 - 軍のトップ、統合参謀総長を拘束
 - イスタンブールとアンカラの重要施設を一時占拠
- 休暇中のエルドアン大統領はSNSで国民に抵抗を訴え
 - 一般市民が軍に応戦
- 歴史上、最も流血が多いクーデタ（未遂含む）に
 - 軍人と市民合わせて300人前後が死傷
- 政府は非常事態宣言を発し、反体制派を徹底的に取り締まり

ギュレン運動とは何か？

●ギュレン運動の特徴

- イスラームの中のスーフイズム（礼拝や断食などの外面的な法規定だけでなく、修行を通じてイスラームの真理を探求する）の一形態
- イスラームとトルコ・ナショナリズムを融合させた考え
- 政教分離の中での信教の自由
- 統治のために国家の存在は不可欠と考える
- 政治への関与に積極的だが、独自の政党は持たず
- 教育活動、ビジネス、国際的なネットワーク、メディアの活用
- （他者への）「寛容と対話」、宗教的な奉仕（ヒズメット）を強調

2本柱からの変化：ロシアとの関係

- ロシアは2015年9月30日からシリアにおいて空爆を開始
- 11月24日のトルコ軍機によるロシア軍機撃墜事件が勃発
- ロシアは経済制裁を発動
 - ビザなしの渡航禁止／17品目の輸入禁止
- ロシアはトルコにとって主要な石油と天然ガスの輸入国
 - 石油はイラク、イランに次ぐ**3番目**、天然ガスは**1番目**
- アクツユで進められている原発事業も一時的に停止
- トルコの**観光業に大きな打撃**

ロシアとの関係改善

- 2016年6月29日にトルコとロシアは関係正常化に合意
 - 6月30日にロシアは経済制裁を解除
 - 7月1日には外相会談を実施
 - 8月9日にはエルドアンとプーチンが会談
 - (i) 原発事業の再開を確認
 - (ii) ロシア人観光客向けのチャーター便再開を確認
 - (iii) トルコ経由でロシアの天然ガスを欧州に輸出する計画を確認

ロシアとの関係深化

- 8回にわたるアスタナ会合の実施（ロシア・イラン・トルコ）
- 2017年から本格的にロシア人観光客がトルコに戻ったことで、停滞していたトルコの観光業は2017年に再び活性化
- 2017年10月には、禁輸措置が解けていなかったトマトのロシアへの輸出も解禁されることが決定

*2017年9月にロシアの防空ミサイルシステムS-400の購入を決定

2本柱からの変化：新オスマン主義外交

- バルカン半島で危機が発生したことが契機で発現
- オザル、デミレル、ダーヴトオールが提唱者
- オスマン帝国の領土だった中東やバルカン半島における
= トルコの役割に焦点当てる
- 中東重視と民族主義重視とする姿勢と重複
- ダヴトオール
「アフガニスタンやバルカン半島の国々で、市民が依然として
オスマン帝国時代のように、トルコを盟主として認識」

トルコの対カタール外交

- トルコとカタール（カタール）は、「アラブの春」以降、ムスリム同胞団への支持で関係を強める
 - 6月5日にサウジアラビア、UAE、バハレーン、エジプトがカタールに対して国交を断絶すると発表
 - 他国が二の足を踏む中、**トルコはカタールを積極的に支援**
 - カタール救済のために支援物資を積極的に送る（例年の3倍の額）
 - 断交を敢行した4カ国がカタールからのトルコ軍の引き上げ（2014年から駐留）を要求 →エルドアン大統領はこれを拒否
- ➡ただし、トルコはサウジと極端に関係が悪化するのも避けたい

トルコの北アフリカへの関与

- トルコは2017年9月30日にソマリアのモガディシュに5000万ドルをつぎこみ、トルコ軍の**世界最大の海外基地を建設**
→この基地では1万人以上が訓練を受けることができ、
トルコがアフリカの角の防衛を今後長期に渡り担う意志
- 2017年12月、エルドアン大統領は**スーダンのスアキン島の購入**
に前向きな姿勢
→メッカ巡礼ツアーの中継地？
→新たな軍事基地建設？

2本柱からの変化：トルコとKRGの関係

- KRGは2017年9月25日に独立を問う国民投票を行い、93%前後の賛成を得て、国家建設に向けた動きを強めた
 - ←しかし、その後、イラク中央政府、イラン、トルコが反発
 - ←KRGが事実上支配していた係争地がイラク中央政府の軍によって奪還される
 - ←国民投票の結果は事実上凍結状態に
- トルコはKRGと良好な関係を保っていたが、**クルドの独立国家**
建国はレッドラインであり、認められないという立場

トルコの北シリアに対する関与

- 2016年8月24日にシリアに軍事介入（「ユーフラテスの盾」作戦）
 - 国境付近のISの掃討、PYD/YPGをユーフラテス川の東側に押し返す（封じ込める）ことを目的とする→2016年3月29日に終了
 - しかし、撤退後もシリア北部に越境して空爆を敢行
 - 2017年1月20日からアフリンにおいて「オリーブの枝」作戦を開始
- ➡トルコ政府は北シリアでのクルド人の自治を絶対に認めない考え

トルコ外交における2017年

- 公正発展党は外交指針の中でこれまで西洋と中東を重視
- しかし、近年アメリカとの関係悪化により、西洋重視の伝統が後退
⇔代わりにロシアを重視するユーラシア主義が台頭
→加えて、イラクとシリアの対クルド対策が外交上の大きな問題に
➡これまでの2本柱から3.5本の柱に
- 2018年もこの傾向が継続する見通し